

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年八月十四日(土曜日) 午後五時開演

狂言 栗焼(くりやき)

主人は伯父から見事な丹波栗を四十個贈られました。「四十」の意味を「始終仲良く」と判じた太郎冠者に栗を焼かせ、一族に賞味させることを思い立ちます。太郎冠者はお台所の炭火で栗を焼きます。栗が飛んで驚いた太郎冠者は、栗の皮の目を切り、飛ばない栗を囃したり、仕事は仕事で楽しんで、こんがり焼き上がった栗を、焼け色や匂いの誘惑に負けて、つい試食に及びます。一つのつもりが全部を平らげてしまいます。主人への言い訳にはかまどの神三十六人に供えたとします。残りは虫食い、逃げ栗、追い栗、灰紛れで失せたと説明しますが、もちろん通じません。

能 是界(ぜがい)

空を翔り海を越えて東の方日本を目指す天狗(前シテ)がいました。日本が仏法の盛んな神国と聞いて、慢心の輩を天狗道に誘引し自分の行力を試そうとする、大唐の天狗の首領是界坊です。まず都の北西愛宕山に着いた是界坊は日本の天狗を代表する太郎坊(ツレ)に協力を求め、日本の天台山というべき比叡山を狙うことにします。仏敵・法敵の魔境に沈み鬼畜の身を借る悲しさを、天狗たちなりに思わないわけではありません。不動明王に通じないと分かっている、慢心の旗矛を掲げるのが天狗の宿命です。是界坊たちは恐れる心を励まして嵐と共に比叡山に向かいます(中入)。都では天狗の妨げが始まり、祈祷の勅命を受けた比叡山の僧たち(ワキ・ワキツレ)が急いで山を下ります。その途中、僧の乗る車の前には是界坊(後シテ)が襲来します。是界坊は仏道即ち魔道であると挑発し、僧は魔仏は一つ、人間の心は清浄にして不動であると祈ります。祈りの声に連れて不動明王や王城の守護神たちが是界坊を取り囲み、神風を吹かせて是界坊の通力を消滅させます。二度と来ないという声を空に残して、是界坊は雲路に消えます。是界坊絵巻に取材した室町中期、竹田法印の作かと思えます。

(西村 聡)

前シテ(是界坊)
後シテ(天狗)

兜巾 篠懸 厚板 白大口 水衣 小刀 扇 数珠
面(大癒見) 赤頭 大兜巾 厚板 半切 狩衣 腰帯 羽團扇

(六時半頃終了予定)